

ヤチシャジンの栽培増殖について (2)

尾崎 健司

ヤチシャジンの自生地状況及び外部形態については、本誌第17号で報告した。本園で栽培した株は、1995年(平成7年)7月28日から9月8日までの43日間に渡って開花し、その後完熟した種子約1,000粒を採取した。本号では、本種を効率的に増殖するために、実生法及び茎挿し法について試みたので、その結果を報告する。

1 実生法

1995年10月9日から11月13日の間に採取した約1,000粒の種子は、採種後すぐにプラスチック容器に入れて密封し、5℃の冷蔵庫で1995年11月27日までの36日間保存した。種子は、その色からこげ茶色、うすい茶色の2型に分けた。低温の発芽に及ぼす影響を調べるため、これらの種子を更にそのまま5℃の低温で30日間及び60日間保存の後、播種に用いた。播種床には市販のピート板を用いた。光の発芽に及ぼす影響を調べるため、ピートモスで種子がかくれる程度の覆土をした場合と、全く覆土をしない場合についての比較も行うため、合計8区の試験区を設けた。播種した鉢は、最低温度10℃のガラス温室で管理した。供試数は各区100粒とし、その結果を表1に示した。

表1 ヤチシャジンの発芽率(5日ごとの累計・%)

種子の型	区	5日後	10日後	15日後	20日後	25日後	30日後	
こげ茶色	66日間低温処理	覆土あり	2	4	6	8	9	10
		覆土なし	8	18	26	26	26	28
	96日間低温処理	覆土あり	19	24	24	24	24	24
		覆土なし	23	47	50	50	50	50
うすい茶色	66日間低温処理	覆土あり	3	5	10	10	10	10
		覆土なし	14	17	18	18	18	18
	96日間低温処理	覆土あり	18	21	21	21	21	21
		覆土なし	9	19	22	22	22	22

こげ茶色とうすい茶色の種子では、こげ茶色の種子が高い発芽率を示した。これは種子の充実度に起因すると思われる。また、種子の型や覆土の有無に関係なく、96日間低温処理区の方が発芽率が高かった。更に、種子の型や低温処理の長さに関係なく、覆土の無い方が、覆土をした場合に比べ、高い発芽率を示した。

以上の結果から、発芽するためには一定期間の低温と光が必要なことが分かった。ただし、今回は低温処理無しのを設けていなかったため、今後、この条件も含め、最適な低温処理温度と期間を検討する必要がある。今回の場合、種子繁殖による増殖は、発芽率が10~50%と低く、発芽に要する日数も5~15日と揃っていなかった。しかし、採取できる種子数が多く処理も簡単なので、有効な増殖手段だと思われる。

2 茎挿し法

この方法には、30~40cmに伸長した太く充実した茎の先端から1~2節及びその下の3~4節を用いた。1996年6月5日、3~4枚の葉をつけた挿し穂を5cmの長さに調整し、1時間水揚げを行った。その後、発根促進剤のオキシベロン粉剤0.5を粉衣した場合と、しない場合に分けて発根率を調べた。なお、挿し床には鹿沼土を用い、供試数は各区とも10本とした。その結果を表2に示した。

処置約30日後に茎の切り口にカルス状のものが形成され、約60日後にそこから発根が確認された(写真A)。発根促進剤を用いた場合に70~80%の発根率が得られた。特定の個体の保存が求められる場合などにこの方法は有効であると思われるが、現在は地上部は枯れており、春になって、地中から萌芽してくるか、観察を続ける必要がある。節間も挿し穂として使えるが、茎頂部の方がポット上げ後の生育

表2 ヤチシャジンの茎挿し90日後の発根率

オキシベロン	挿し穂部位	発根率(%)
使用	茎頂部上から1～2節	80
	中間部上から3～4節	70
未使用	茎頂部上から1～2節	30
	中間部上から3～4節	10

が良好であった。

増殖した実生苗は、本葉3～4枚で播種約60日後に、茎挿し苗は処置約90日後に赤玉土：ボラ土＝1：1の培養土にポット上げし、生育中は10日に1回の割合でハイポネックス1000倍液を与え、肥培管理に努めた(写真B)。1996年10月現在、株張り約15cmの実生苗約100株が順調に生育中で、1997年春には、栽培及び増殖の依頼があった甲山町公民館に引き渡しを行う予定である。

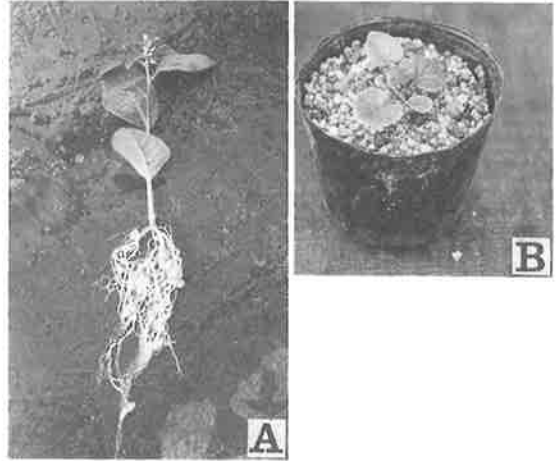


写真 ヤチシャジンの増殖の様子

- A 茎葉挿し90日後の発根状況
(1～2節, オキシベロン粉剤0.5使用)
- B ポット上げた発芽苗(播種60日後)

重慶市から新たに寄贈された菊の品種特性

井上尚子・門村逸喜・井内一樹

平成8年は、広島市と中国重慶市との友好都市提携10周年にあたり、これを記念して両市で栽培菊の品種交換を行い、菊の特別展示を行った。この度の品種交換によって広島市に新たに寄贈された中国菊62品種について、栽培経過と特性を報告する。



苗は、平成8年5月3日に1品種3本ずつ受け取った。苗は、ただちに4号鉢に植え付け、よしずで遮光して管理した。苗に根がなかった品種「夕陽紅」と「金墨生輝」は、活着しなかった。活着した品種については、5月26日に摘心を兼ねて1回目の挿し芽を行い、6月11日、13日に側芽を用いて2回目の挿し芽を行った。発根した苗は、4号鉢に鉢上げし、7月下旬に5～6号鉢に植え替え、8月下旬に8～9号鉢に定植した。はじめに挿した苗は、7月上旬に1回目の摘心を行った。あとに挿した苗は、はじめに挿した苗の2回目の摘心とあわせて、7月



日本と中国の菊展 展示風景(平成8年11月)